

航空機乗務員等の宇宙線被ばくに関する報告書案に対する委員コメント

○藤高委員コメント

[1] 最初に頂いたファイルのp7（イ）の最後あたり、『2.太陽活動の影響は、通常の飛行高度（12,000m以下）の範囲内であれば大きくはなく、むしろ緯度（航路）による影響の方が大きく寄与すること』→ これは「同じ緯度ならば飛行高度が影響すると思えない」という程度の方が誤解されない、と思う。資料1－2の“図6 航空機被ばくに対する太陽活動の影響”を参照。また、現在の航空機の飛行高度を考える限り、という点に留意する必要があると思う。

[2] 元のファイルの、p12の先頭部分、『被ばくが十分に制御されると思われる』→ これは簡単に「被ばくは制御されると思われる」と述べた方が良くはないか。この上の文章では、運航時間の量については何も言っていないため。

[3] 元のファイルの「2.我が国の既存の法令における宇宙線被ばくに関する現状」の最後『よって、我が国の法体系において、航空機乗務員の宇宙線被ばくは、あらゆる法律において規制対象外となっている』→ これはその通りだが、まさにその点をICRPに指摘されているので、その対処について何かコメントをした方が良くと思う。ただ、ここでは『現状』ですので、その点をふまえればこのままでも結構。

[4] 元のファイルのp14の1.“航空機乗務員等の宇宙線被ばくへの対応の必要性”の下から6行目より上の部分で、『「介入」の対象としての要素はあるが、上記ICRP.Pub82の基準被ばく線量から考えると、「介入が正当化」されそうにない一般参考レベル』の被ばく線量である』→ このままでも結構だが、その背景にあるものを考えると、あくまで航空機を考えたもの、という感じがする。近い将来にもっと高い所を飛ぶ高高度飛行機（高度20kmにもなると、高度が太陽活動の影響を直接的に受けるため）や、さらには観光目的の宇宙飛行が大量になったとき、等への対処を考えていないのではないか、という感じだ。いや考えていると言われれば、そうかも知れないが、その背景にあるものを感じる。つまり、そもそも宇宙線をどう扱うか、という根本問題の解決を先送りしているのではないか、と思える。将来、大量の人類が宇宙に出かけて宇宙活動を盛んに行う時代が来たときに（遅かれ、早かれ）、再度考え直すことになると思う。きわめて深淵な問題を内包している。

[5] 元のファイルのp15の、『2.航空機乗務員等の宇宙線被ばくへの対処方法.イ』に「校正目的での実測を行なって」とあるのは、軽々しくなく、受け止める必要があると思う。モデルに実証はつきものなので、それを重々承知した読者を期待する。